

【MedTec Forum】 3回生フレッシュマンセミナー

三好浩稔 (人間総合科学研究科 / 基礎医学系)

3回生のフレッシュマンセミナーを1学期に行った。本稿では、このセミナーの意図や内容について振り返るとともに、セミナーを通して自分なりに考えたこと、感じたことを述べることにする。私が担任をしている F クラスの学生にとっては、セミナーで話した内容と重複する部分も多いがご容赦願いたい。

フレッシュマンセミナーは新入生が大学生活に早く適応できるようにするためのセミナーであり、内容の大半は担任教員の裁量に任されている。本年度も、大学からの主な要望は、1) 新入生が様々な(精神的や身体的な)問題に直面したときの対処法(相談先)を教えて欲しい、2) 学生が将来のキャリアをイメージできるような内容を含めて欲しい、という2点だけであった。さらに、セミナーの目的にはクラスの親睦を深めることも含まれているため、スポーツやバーベキューをすることも認められている。このように、セミナーの内容の自由度が極めて高いために、クラスによって実施内容が大きく異なることも珍しくない。

本年度のセミナーを行うにあたっては、E クラス担任の東野先生だけでなく看護学主専攻のクラス担任の先生も含めて、看護・医療科学類としてセミナーをどのように進めるかについて何度か話し合った。それは、多くのクラス担任から、「同じ学類のクラス間でフレッシュマンセミナーの内容があまりに違いすぎるのは好ましくないし、ある程度は統一した形式でセミナーを行いたい。」との希望が出されたためであった。また、東野先生と相談した結果、通常の授業とは異なり少人数でセミナーを行える良い機会なので、医療科学主専攻では基本的にクラスごとに別れてフレッシュマンセミナーを行うことにした。

これらの議論を経て、本年度のフレッシュマンセミナーは看護学主専攻、医療科学主専攻

ともに、設定されたテーマをグループごとに調べて発表し、その内容をもとに討論するという形式で行った。また、両主専攻で共通のテーマである安全教育については、つくば中央警察署から講師を招いて全員参加の講義を受けた。

私が担当した F クラスでは、5名程度のグループに分かれて発表してもらった。最初に希望している進路に関する事柄について調べてもらったので、希望進路ごとにグループをわけた。ここで予想外だったのは、かなりの学生が臨床検査技師として病院で働くことを希望しており、大学院へ進学して研究職などに就きたいと考えている学生は数名程度であったことである。新入生にとってみれば、ようやく大学に入ったばかりでいきなり職業のことを聞かれても実感が湧かなかったのかも知れないし、進学したいと言いながら成績が悪かったら格好悪い、などと考えたのかも知れない。よって、とりあえず臨床検査技師として働きたいと述べた者もいたのだろう。しかし、臨床検査技師を養成するのが本学類の目標ならば、従来の短期大学部のように3年間のカリキュラムで十分なはずである。なのに、なぜこの学類は4年間のカリキュラムを持っているのかということを生徒一人一人が今後あらためて考え、目標をもっと高く設定してもらいたい。その一方で、教員も彼らが将来を具体的にイメージできて大学院進学希望者が増加するような材料を、講義だけでなくいろいろな機会に積極的に提供する努力をせねばならないと感じた。

セミナーの発表において学生が選んだテーマはかなり幅広いものであり、卒業するための必要条件、臨床検査技師国家試験の情報、卒業後に海外で活躍するための情報、さらに特定の資格を取るための情報、などがあつた。これらの詳細についてはここでは省略するが、

わからないなりに大半の学生はかなりまじめに取り組んでおり、自分たちの調べた内容や他のグループの報告によって少しは自身の将来像をイメージできたと思う。ただ、調べた内容を皆の前で発表するというスタイルに慣れていないためか恥ずかしそうにモジモジと発表する者が多く、せつかく調べた内容が上手く他の学生に伝わらないケースが見受けられた。

自分の考えを相手に上手く伝えることは、これから発表を多く経験することによって身に付くものなのだが、将来的にはますます重要視される項目である。中には、「いや、私は教員になるわけではないし、説明は上手くできなくても黙々と仕事をこなしますから。」という者もあるだろうし、それはそれで結構だ。しかし、グループで医療を行ったり後輩に技術を伝えたりする場合には、自分の考えや意見を的確に伝える能力が要求される。とりわけ、職位が上がって部下を持つような立場になれば自ずと指導する機会も多くなることから、自分の考えが上手く伝わらなければ仕事は進まない。実際に私がかつて所属していた民間企業では、ある職位になるための審査で説明能力が試されていた。仕事の成果は、その人がたまたま担当していた業務の内容によっても左右されるため（結果が出やすい仕事もあれば、そうではないものもある）、公平な評価は難しい面がある。しかし、自分の考えを伝えるためのプレゼンテーションする能力は仕事の成果にかかわらず評価できるために重要な評価項目であり、この能力が十分でないと職位が上がらないのである。これらのことから、自分の考えを上手く伝えるということの重要性を再認識して頂きたい。

話をフレッシュマンセミナーに戻そう。発表においてもう一つ私が驚いたことは、学生からの質問が全くと言っていいほど出ないのである。最初の頃は、学生には勝手がわからないため質問しにくいだろうと思い私が質問したが、いつまでたっても積極的に質問する学生はいなかった。こちらから指名しても、「特にありません。」などと答えるのみである。では、「発表

内容がわかったのか？」ときくと、わかっていないのである。

実は「質問する」という能力も、コミュニケーションをとる際には前述の「自分の考えを伝える」こと以上に重要である。その理由は、就職したときのことをイメージしてもらおうと容易に理解できるだろう。学生のうちは「先生」という「教えること」を専門にしている人がいるので、何となく質問しても回答してくれる。あいまいな質問でも、「君の聞きたいことはこういうことですか？」などと懇切丁寧に教えてくれることが多いだろう。しかし、就職してしまえば、「教えること」を専門とする人などいないのである。業務についてわからないことがあれば先輩に質問するだろうが、その質問に回答する間は、先輩は自身の業務を中断せねばならない。つまり、先輩にとっては、質問に回答することはある意味で「余分な仕事」なのである。さらに、その質問の内容が要領を得ないものであったら、「君はいったい何が聞きたいのか？」と叱られて回答も得られないだろう。従って、質問する側もそれなりの誠意を示す必要がある。そのためには、質問する際には「どこまでは理解できたが、どこからがわからないのか。」ということをまず明確にしなければならない。さらに、時間的に余裕がある場合には、自分で疑問点を調べてみることで、わからない範囲を狭めてから質問することも重要である。質問する者が努力している姿勢を示せば、回答する者も気持ちよく答えてくれるだろう。

上記のように、「質問する」能力は就職してすぐに必要となる。よって、残り数年の学生生活のうちに質問能力を磨いておかなければならない。そのためには相手の話を良く聞くというのは当然であり、できれば講義などは「何か質問するぞ。」と意識しながら話を聞いてほしい。さらに、「多く」、あるいは「良い」質問をする友人は、どのような質問をしているのかを注力して聞くことも有効だろう。もっとも、このように書いている私自身は昔から質問することが大の苦手なので、これらの考えが参考になるかどうかは疑わしいが、漠然と話を聞いているよりは

マシだろう。数年後には、講義中や講義のあと、あるいは卒業研究の発表会などで、学生からどんどん質問が出るようになってきていることを期待している。

話は変わるが、本年度のフレッシュマンセミナーや新入生オリエンテーションを通して、学生の情報の受け取り方に問題があると感じたので、そのことについて述べる。既に2学期に入っているので多くの学生は大学のシステムに慣れ、事務連絡などの情報を得る方法についてもわかってきていると思う。授業の変更や各種事務手続きといった事務連絡は、主に掲示された文書により通達される。これは社会に出ても同様であり、高校時代のように重要な情報を先生が念を押して教えてくれることはない。これらの情報を逃して困るのは学生自身なので、絶えず情報を逃がさないように努力しておかなければならない。情報を逃したあげく、「先生や事務がちゃんと説明しなかった！」と主張しても、ほとんどの学生が正しい情報を得ている以上、このような言い訳は通用しない。

では、なぜ今さらこんな話をするのかといえれば、この大学の学生への対応は他大学に比べてかなり丁寧で、悪い言い方をすれば過保護なのである。この意見には反論もあるが、私はそう感じている。私の学生時代(他大学)には担任の教員など知らなかったし(名目上はあったのだろう)、ましてや事務や担任から連絡があることは考えられなかった。そのような連絡があるのは、授業料滞納で退学の危機に瀕しているときぐらいである。ところが筑波大学では、学生がしばらく大学に来ていないだけで担任や事務が心配して連絡してくれるし、単位の心配があれば担任が相談に乗ってくれる。また他学類では、必修授業の試験開始時に教室にいないだけで、事務から電話がかかってきて知らせてくれるところもある。

私が言いたいのは、「筑波大学の学生に対する対応が普通だと思わないで欲しいし、それに甘えないで欲しい。」ということである。他の大学なら、大学に来てなくても、単位が足りなく

ても誰も何も言わない。進級に影響する必修科目の試験を寝過ごしてしまえば、その時点で留年決定である。このように重要な情報を逃しても誰も助けてくれない。全ては自分の責任であり、社会人になれば当然のことである。

ここまで書くと、何か年寄りの愚痴ばかりのようになってしまい、建設的な内容に乏しいがお許し頂きたい。学生達は、まだ大学に入学したばかりだと思っているかも知れない。しかし、大学院に進学しないのであれば実は社会人になるまでの期間はそれほど残されていない、というも事実である。残りの大学生活は、社会人となるための準備期間である。小学校、中学校、高校そして大学と、これまで10年以上続いてきた学生生活もそろそろ終わりに近づいている。社会人になれば、ほとんどは自分の責任において行動せねばならず、学生時代のように自由ではない。そのかわり、勤労によって賃金を得て、独立した生活ができる。繰り返すが、これは数年後に確実にやってくるのである。従って、その時のことを頭の片隅にイメージして大学生活を送ってもらいたい。それには、学問的・専門的な進歩もちろん必要だが、個人の自覚という精神面での成長も不可欠である。

これからの学生生活において、学業的には臨床実習や卒業研究、また大学外でもアルバイトのように、入学以前にはほとんど無かった経験をしたあとで皆がどれくらい成長するのかを楽しみにしている。